

## 倭は国のまほろば

倭は国のまほろば たたなづく  
青垣 山隠れる 倭し美し

「大和は国の中でも最も優れた国である。畳み重ねたようにくっついた、国の周囲を廻る、青々とした垣のような山々の内に籠もっている。大和は美しい。（竹田恒泰著「現代語古事記」から）」

この歌は、倭建命が詠んだ望郷の歌であり、古事記に残されているものです。

この古事記は、編纂に当たった太安万侶が、時の女帝・元明天皇に謹んで献上したのが和銅5年（712年）正月28日とされていますから、今年は、古事記が成立して丁度1300年という記念の年に当たります。

ほぼ同じ時期に編纂された日本書紀の成立が養老4年（720年）ですから、文字通り我が国最古の歴史書ということになります。

既に、古事記1300年を記念して、雑誌などでも特集が組まれたりしておりますので、今年は古事記への関心が高まることが期待されます。

古事記や日本書紀については、戦後、神話であり史実ではない、科学的ではないといった理由によって、我が国の歴史教育から遠ざけられてきました。いい方を変えれば、記紀に対して不当な扱いをしてきたともいえます。

しかし、古事記の編纂は、その序にもあるように、天武天皇の「諸家に伝わる帝紀（天皇の事績を記したもの）と本辞（旧辞、神話などの伝承）はすでに真実と異なっていて、多くの偽りを加えているという。今この時にその誤りを改めなければ、幾年も経たずしてその趣旨は滅んでしまうであろう。帝紀と旧辞は、すなわち国家組織の原理であり、天皇の統治の基礎となるものである。ゆえに、帝紀と旧辞を調べ直して、偽りを削り、真実を定めて撰録し、後の世に伝えよう（前述「現代語訳古事記」から）」という崇高な志のもとに、国家的プロジェクトとして取り組まれたものです。

古事記の全体は上中下の3巻からなっており、上巻は神の代の物語、中巻は初代神武天皇から15代応神天皇までの歴史物語、下巻は16代仁徳天皇から33代推古天皇までの歴史物語を収めています。

冒頭紹介した倭建命の望郷の歌は、中巻景行天皇に関わる歴史の中で、東奔西走して国づくりに奔走し、遂には東国遠征先で病に倒れ、故郷を偲びながら詠った歌として描かれているものです。

竹田恒泰氏らの研究によると、全30巻にも及ぶ日本書紀は正史として対外的に用いられたのに対して、古事記は国内向けに用いられたと考えられていますが、単に土地に伝わる伝記や伝承をまとめたものではなく、強大な中国の脅威に晒されてきた日本が、国史を編纂して神々から代々の天皇に至る系譜を示し、国の成り立ちを明らかにすることによって、国としてのアイデンティティを確立する狙いがあったのではないかと思います。

古事記に残されている記録は、神話や芸能などの日本文化に大きな影響を与えているばかりでなく、古事記に登場する沢山の神々の中には、今でも各地の神社に祭られているものがあり、日本人の宗教観や精神に対して大きな影響を与えてきました。その意味で、古事記は、日本と日本人を知る上で貴重な記録であるといえましょう。

ただ、古事記には夥しい数の神様の名前と人名が登場し、それを見ているだけで大抵の人は挫折感を味わう事になりますので、なかなか手が出ないというのも仕方ありません。そこで、慶応大学の竹田恒泰先生に、古事記を楽しく読む方法を伝授して頂いたところ、それは神様と人の名が出てきたら「直ぐに忘れること」なのだそうです。

古事記は、物語が難しいといよりも、神様の名前や人名が難しいというのが第一印象ですから、神様の名前を読み飛ばして良いということになると、少しは気楽にチャレンジできそうですね。

本屋さんには、現代語に訳された何種類もの古事記が沢山出版されていますので、是非一度、ご覧いただければと思います。(塾頭 吉田 洋一)